

授業実施：2025 年 9 月

学年・教科：6 年生 単元名：今の自分を見つめ、未来の自分を考える

時	活動	成果・子どもたちの様子	備考
1	大谷翔平の曼荼羅チャートや、ウェブ上の職業適性検査を実施し、自分探求への糸口を掴む	世界で大活躍している有名人にも、地道な努力や、悩み、考えがあった事を知り、親子で <u>今何から出来るのか</u> を話し合うことができた。職業適性検査をする子供達は、ものすごく真剣で、検査条項の回答をめぐり、親子で活発な対話が見られ、子供達にとって、「今の自分を見つめる」良い機会となった。	参観日でもあったため、多数の保護者に参加頂けた。
2	様々な大人の方への「夢」インタビュー	教科書単元『聞いて考えを深めよう』から学習した、インタビューの仕方を実践。特に丁寧語や敬語の使い方は、普段あまり触れる機会がないので、緊張も見られたが、自分達が主導でできる事に興味を示していた。聞いた意見に共感したり、自分の経験や、質問を含め、実践できた。日本語が苦手な児童は、英語で警備員の方にインタビューし、とても盛り上がっていた様子だった。ただし、その児童は、クラスでの発表でその内容を一生懸命に日本語でクラスに伝える努力をしていたのが伺えた。この活動を通して、やはり大人にも「夢」があって、その実現のための努力や、今は描いていた夢とは違う職業につきながらも、努力が無駄ではなく、それなりにかつて描いていた未来図に近い現実にいることに勇気づけられていた児童たちも多かった。	
3	本校 OB の経験談を zoom で日本と繋ぎ聞く	身近な、年の近い OB から意見を聞こことで、より具体的に「夢」への道の具体案が芽生えた生徒もいた。特に特待生という優遇された学生生活に憧れを抱く児童もあり、それはさらに参加した保護者達から顕著に何う事ができた。そのOB から一貫して得た情報としては、「何事も無駄になることはなく、たとえ途中で辞めたとしてもそれで終わりではなく、また君たちが歩む人生のレールへと再び現れることもある。」という事だ。子供達はその奇妙な人生の数直線を自分のものと置き換えて、想像しながら話を聞いていた。	保護者参加
4	本校 OG とカナダの補習校に通った経験を持つ保護者からお話を聞く	本校 OG からは帰国子女枠での日本の大学受験方法を具体的に聞き、彼女が補習校時代は全く勉強には興味なく、お友達と会うことだけを楽しみに通っていたと聞き、共感する生徒が多数見られた。それでも大学入試に力を注ぎ、見事帰国子女枠で入学出来た事実は、子供達に偉大なる希望を与えてくれたと思う。特に日本の大学の授業料が、アメリカと比べ、非常に安価である事実は、保護者達にとっても興味のある内容だった。子供達は勉強以外の、日本での暮らし、ファッションの事など積極的に質問していた。カナダの補習校に通っていた保護者の中で、せっかく習得した英語を、「恥ずかしい」という事から日本へ帰国後あまり話さなくなつて、次第に忘れていったと聞き、時代の流れで人の価値観に違いがある事を知らされた。それでもその保護者は過去に学んだ英語をもう一度やりたいという意思を全うし、再びカナダの大学へ入ったと聞き、先のOB が話していた、「人生途中で辞めた事も、またいつか人生のレールに現れる時がくるかもしれない」というアイディアに繋がったようだ。	
5	10 年後の自分へ～手紙～	今までの活動を通して、様々な人との対話から「今の自分」を見つめる機会があった。今度はそれをアンジェラアキさんの『～手紙～十五の君へ』の詩をもとに「未来の自分を考える」機会とした。未来の自分へ宛てた手紙を書く事は、実際には今の自分をより深く見つめる結果となった事が、一番の発見であったかもしれない。その手紙には、「素直に人に聞けてますか？」「12 歳の自分は、とても苦しい思いをしていましたが、今は大丈夫ですか？」や、「お父さんといういろいろあったけど、仲良くしていますか？」などと問いかけているものもあった。また一番多く見られたのが、「僕は(私は)君を一番応援しているよ！頑張って！」という文章だった。最後にこの手紙を 10 年後に送信設定して送った。	保護者参加

伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など

子供達は、「今の自分を見つめる」事ができ、保護者の協力を頂けた事で、親子の絆も深まったように思う。子供達は 10 年後の自分に向けた手紙から、自分への愛情と、他人への優しさを学んでくれた気がする。それを見守る保護者の中には、「私も 10 年後の息子に手紙を書きます。」というコメントや、日本の大学への進学への門戸が開けられているのを知り、より具体的にその道を子供と一緒に調べたいとおっしゃる方も出てきた。

所感

最初の思惑とは異なり、かなり壮大な研究授業へと発展してしまったかもしれないが、その一つ一つの活動に意味があり、時間がとれたからこそ子供達は、真摯に自分と向き合う機会をもてたのだと思う。この活動を通して、ティーンならではの希薄になりがちな親子関係も、お互いの過去や未来を話す機会が充てがわれた事で、良好な親子関係を構築する足掛かりとなったのではないだろうか。またここにきて、当校の OBOG の活躍を見られた私自身、この繋がりをとても大切に思うと同時に、大変誇らしい気持ちになったのである。